

# 川喜田半泥子の千歳山荘とその時代

●日時:2024年4月25日(木) ●会場:東洋軒本店 ●講師:菅原 洋一 氏(三重大学名誉教授)

4月25日JIA三重2024年度総会が津市丸之内「東洋軒本店」開催されました。

総会終了後、菅原洋一三重大学名誉教授による記念講演会が行われました。演題は「川喜田半泥子の千歳山荘とその時代」で菅原先生の永年に亘る調査研究の報告と今後の津市のまちづくりにかける熱い思いが語られました。

川喜田半泥子、本名久太夫政令(1878～1963、明治11～昭和38)は百五銀行の頭取を務めた実業家でしたが、一方で「東の魯山人、西の半泥子」と称された陶芸・書・俳句・絵画・茶道などに長けた文化人でもありました。川喜田家は元々木綿を扱う伊勢商人で江戸にも店を構えていましたが、本宅は津の分部町(現松菱百貨店の位置)にあり、当主はここで生活していました。百五銀行は元士族により設立された銀行でしたが、明治期の合併吸収などを経てその株を川喜田家が引き受けることになり銀行の経営に関わることになりました。半泥子は1919年(大正8)に第6代頭取となって1945年(昭和20)までその役を担いました。銀行本店からの帰途、川向うに見える千歳山に魅せられ1915年(大正4)ここに山荘を建て居を移します。10年後の1925年(大正14)には「千歳窯」を開き「半泥子」と号して、この地の陶土を使って陶芸作品を焼き様々な文化人と交流を深めます。

この山荘は1911年(明治44)に旧知の建築家大江新太郎氏(※)の設計によるもので、「イングリッシュ・コテージ式」ともされる田園住宅風の邸宅で洋館と和館が一体となった建築でした。設計図面は同年に開催された「東京勸業展覧会」に出展され好評を博しました。完成した山荘は当初案より規模は縮小されたものの、多くの客人との親交の場ともなっていました。しかしその後、数奇な運命を辿ることになります。1943年(昭和18)鈴鹿の海軍工廠に寄贈・移築され、戦後1950年(昭和25)には同市内で再移築されて電電公社の施設に、さらに1984～1985年(昭和59～60)電電公社の民営化に伴い取壊しとなります。その報道に接した



講演をする菅原氏



講演会の風景



▲ 鈴鹿にて解体直前の千歳山荘  
◀ 記念講演会チラシ

県外の民間団体が翌1986年(昭和61)に移築のため部材を搬出保管することになります。しかしその後再建されることなく部材の所在も不明のままでしたが、行方調査によって民間団体の倉庫に保管されていることが分かりました。そして津市教育委員会などが現地を検分をした結果大部分の部材は健全でそれらの部材による復元は十分可能であると判断されています。また鈴鹿での解体前には三重大学と名古屋大学共同による記録保存調査が行われており復元のための貴重な資料ともなっています。

千歳山は川喜田家から津市に寄贈され、そこには現在半泥子の作品などを公開展示する「石水博物館」や国登録有形文化財の収蔵庫「千歳文庫」などの施設があります。

そして「半泥子と千歳山の会(半泥子と千歳山の文化遺産を継承する会)」では半泥子の功績を顕彰し、千歳山を拠点とした津市の新しい町づくりを提案し活動を行っています。

- 提案1:千歳山に半泥子を偲ぶ千歳山荘を復元整備し津の顔、津の魅力をつくる
- 提案2:全国的知名度を持つ半泥子のイメージを津市のまちづくりに活用する
- 提案3:半泥子生誕150年(2028年)を目標とした千歳山の整備を行う
- 提案4:地域と行政の協働で、町づくりを行う新しい形を確立する

私たちはこの講演会での話を聞き、半泥子の千歳山荘が復元され、それを核とした公園整備が行われて新しい町づくりが実現されることに期待し、そのための活動に協力する思いを深めました。

※大江新太郎は日光東照宮の修復や明治神宮の造営にも関わり、「明治神宮宝物殿(重要文化財)」の設計も手掛けた人物。

参照資料:菅原洋一氏提供の講演録



滝井 利彰 (JIA三重)  
一級建築士事務所タック設計室